

来た。筆舌に尽きせぬ感無量、嬉しさ一杯、日子さん

(福井県 山口 速雄)

と叫ぼうか、B子と呼んで飛びつこうか。嗚呼再会の望みは無情にも、神は我に与えてくれなかった。惜しんでも、惜しんでも、帰らぬ我が青春。シベリアが憎い。

シベリア抑留からの帰還

神奈川県 鈴木重雄

【執筆者の紹介】

現住所 福井県鯖江市神明町五丁目四一五十七

本籍地 福井県鯖江市鳥羽中町十六一

生年月日 大正十二年三月二十五日

入 隊 昭和十九年二月十日

関東軍瓊瑯六一二部隊

終戦時の居住地 満州国黒河省瓊瑯南丘陵地

入ソ日 昭和二十年九月十日

抑留地 ライチハ

作 業 炭坑

引 揚 昭和二十三年八月十二日

引揚船 遠州丸

上陸地 舞 鶴

私は昭和十九年十二月、東部第六部隊(東京港区赤坂)に北支派遣軍要員として、第一一七師団(弘)一

四六八部隊独立歩兵二〇四大隊第四中隊に入隊、河南省汲県で大隊集合教育の終了前に、三月中旬老河口作戦の南陽攻撃に参加のため教育は中止された。

昭和二十年五月に師団に対し満州転出の命令が出る。

関東軍は南方戦線に転出のため、六月二十八日山海関を通過、関東軍第四四軍、本郷良雄中将(奉天)の指揮下に入り、八七旅団司令部とともに、満州龍江省白城子飛行場整備につき、対ソ連戦に備え、対戦車爆雷訓練、蝟壺掘り等行方。

八月九日、ソ連は日ソ中立条約(昭和二十一年四月まで有効)を無視して、対日宣戦を布告し攻撃を開始

した。八月十二日、戦線縮小のため朝鮮に向けて列車で南下行動に入り、八月十五日大賚城にて終戦の情報あり、城内に集結し、終戦の「承諾必謹」と決まった。八月十六日新京駅構内で三日間停車し、建国大学にて第八労働大隊を編成（一四八九名編成）し、八月二十二日黒河に到着した。町は空、砲撃で、めちゃくちゃ惨憺たる状況でした。

翌日対岸のブラゴエシチェンスクで食糧など貨車積みし、四十両連結の貨車に乗車、九月二十七日シベリア、チタ州西部のチタとバイカル湖の間あたりに位置する、ハラグン第五一五収容所に到着した。十月三日より宿舎構築の作業を開始、用材の伐採、運搬、地掘りなど、半地下式の三段蚕棚で、十月中旬だというのに一メートルぐらいいから永久凍土と岩石に阻まれ、作業の進捗が遅れた。

遅れば遅れるほど、いつまでも屋外のテントの中で暮らさなくてはならないので、皆必死で頑張った。この宿舎はドイツ人用のもので、作業が終了したら帰国できるのだというデマがまた乱れ飛ぶ。夜間作業の

地掘りも全員でさせられたが、大豆粉のどろどろしたスープを飯盒の蓋一杯だけ、時たま明太魚の乾物が主食のときもあった。分隊毎に、肉緒で食べていた所持の食糧も残り少なくて心細くなって、次第に皆の顔が青くなってきた。私たちの給食量の基準は、朝パン二百グラム、砂糖九グラム、昼パン二百グラム、スープとカーシヤ（粥）、夜パン百五十グラムとスープだけ、これにノルマ以上達成のときは増食があった。

十一月十六日、一般棟四、管理棟一の宿舎がやっと完成して、天幕から移動した。天幕を撤去するにも、バリバリに氷結していて裂けるばかりだった。間口十メートル、奥行約五十メートル、深さ地表より約三メートル、これを一棟とし、小さな入口の右手にペーチカ、真ん中が通路で、土間中程と奥に各一個、計三個のペーチカがあり、幅二メートルで両側が寝台となっている。

床板は板ならまだしも、直径十五センチくらいの丸太敷で、上中下三段の蚕棚の方式、一柵毎に一個分隊の割り当てである。丸太の上で寝るのは生まれて初

めてで、臥薪嘗胆という中国の諺を身をもって体験した。この装置を私たちは二段、三段装置と名付けていた。最上段は暑く、二段はほどよく、下段にいる者の部分は、いつも霜がついている。今日も零下二十度は下るまい。

照明は、電気はもちろん、石油ランプもガラス窓もない、作業中に松の根の枯れたものを持ち帰り、これを裂き、缶詰の空き缶に入れ、つるして通路付近に置く。各所にあるので、起床すると、誰彼となく煤で顔が真黒で、人相が変わってしまふ。ペーチカの薪は、帰りに各人適量を持ち帰り燃料とした。

二十年九月、入ソ以来一度も風呂らしい風呂に入つたこともない。体を拭く程度であるが「零下二十度」にも下がってはいは拭きようもない。それにしてもお湯は雪や氷をペーチカで溶かすなど、全部夜間にしかできない。こすると黒い垢がポロポロと出る。伐採作業は一層敷しくなる(作業する場所がだんだんに遠くなり、到着が遅れ、ノルマを消化するのに苦勞する)河が氷結して水が少ない(河底はわずかに流れていて

全部は氷結しない)。

死んだような疲労感、シラミがわく、栄養を取られる栄養失調、死亡するという順序である。朝七時、外はまだ薄暗い中を屋外に整列し、私たちは監視兵の来るのを待つ。やがて一個小隊の兵隊が門に到着、通訳の指示通り順次連れられて行く。収容所を出る前に人員点検をするが、四列縦隊では計算ができないので、五列でなければいけなかった。一名が隊列を確認し、一名が数えるという事で、何回も繰り返す。兵隊でも将校にしても、簡単な計算に弱いので驚くほかほかしい。

私たち二百名の作業員は二人一組で、ピラー二人挽鋸(全長一メートル、刃幅十八センチ、厚み二ミリ位)タポール斧(全長六十センチ、刃幅十五センチ位)各一挺ずつ携行して、伐採現場に行くのである。行進中、監視兵は前後左右に各一名配置され、三十分くらいで湿地帯を過ぎ、幅十メートルの氷上を渡り山に入る。二人一組になり、各組の監督は五十メートルとして伐採を開始する(間隔は倒木による安全対策の

ため)ノルマ一人、薪長さ二メートルもの、高さ一メートル、長さ二メートル、計一組で四立方メートル、細い木だけ切ると楽だけど、量が出ない。太い木だと骨が折れる。いずれも大変で、切り残しはできない。早く現場に位置したのがよい。厄介なのは唐松で、根だけ太く先細で泣く。切株は斧で皮をはぐ。早く腐らせるため、枝は作業中にその場で全部焼き、帰るまでに完全に火を消す。

生まれて初めての樵なので、全然進行しないので焚き火をしていると、監視兵が足蹴りして火を消し、ダワイラポータ(早く作業をしろ)とけしかける、何と口惜しく思ったことか。

やはり私たちはソ連の俘虜で何をされるかわからない。監視兵は私たちより先輩のルーマニア、ベッサラビア人で、彼らは帰国した残留組で、自分たちも早く帰るためにも、毎日のノルマを完遂させなければならぬ。二〜三人が集まっているとすぐに来て、ダワイと自動小銃(通稱マンドリン弾薬七十二発入り)を向けて、すぐ発砲する構えをして驚かす。ダワ

イは入ッして一番最初に覚えたロシア語です。

帰り道、収容所の方向に真赤な死体を焼く炎が見え、今日もまた仲間が死んだのかと、重い足取りで話しながら帰營する。昭和二十一年秋ごろより昭和二十三年頃まで、相当な民主主義運動が繰り広げられ、旧軍隊の階級制は急に影をひそめて行った。

昭和二十二年二月二十日、日中でも太陽が悲しそうに、ぼんやりとした光しか与えてくれない。この気温は零下四十五度を超えるだろう。焚き火をしても、しばらくの間、炎に手をかざしてないと、暖かみが感じられないほど寒いとか痛いとかいったのが正しい表現と思う。

手を見ると、右指が蠟燭のような乳白色をしている。ひどい凍傷だ。交互に指をこすっても、少しも普通の色にはならない。こういうときに、火にかざすのは絶対禁物で、雪で赤くなるまでこすること、これは監視兵から教わったことで、彼も自分の指を出して見せたが、凍傷の跡だった。

支給された防寒帽は大した効果もない。眉毛、髭な

ど呼吸で白くなっている。冷たいとか寒いとか、そんな生易しいものでなく、凍みるように全身、特に手足の先の痛みがひどい。凍傷の原因は、血液の循環が寒さのために悪くなったときに、湿気のある不潔部分がかかる。私も右薬指、右足踵をやられた。黄色のリバノール液の消毒液だけの処置で、治療した指先が短くなり、指紋が薄れる。踵も同じで角の部分が丸くなり、長期間たつと硬化して、ナイフで削り取る。仲間にも、鼻にかかり、なくなった者を見た。何ともかわいそうでならなかった。

酷寒と給与不十分で栄養失調となり、室内軽作業をする。この時期があったので命拾いをしたのかもしれない。昭和二十二年四月、經理小隊に入り、倉庫への搬入作業などやり、健康回復した後中隊に復帰した。

駅分所、ソ連側の指示により下車したところはハラグン駅で、貨車積み込みの人員を出すよう命令が来た。伐採作業を開始してから、大量に野積みされた薪や建築用材の積み出しである。

冬季―伐採地の季節は、トラックへの積み込み作業

―駅ではトラックからおろしと集積作業―貨車積み込み作業、このようなサイクルで繰り返される。

なぜ冬に伐採かという点、木の外皮から中心に五六センチ寒さのため凍っている、脂が鋸につきにくいので、切り易いためです。

運搬には、アメリカの軍事援助物資で供与された、スチュードベーカー社の軍用トラックが主に使用され、威力を発揮した。

山から切り出した建築用材（全長六・五メートル、末口三十センチ以上）を積み込み、その日の最終便に便乗したが、荷崩れを起こし、危なく丸太の下敷きになり、落命するところだった。積み込み作業は昭和二十三年一月まで続いた。

五月二十五日、病弱者二百名は療養のため「チタ」中間集結地病院に入院し、軽作業などをした。

六月二十九日、帰国のため、一個梯団は貨車輸送により「チタ駅」を出発。

七月七日、帰国予定が変更になり「イマン」沿海州地区の小さな駅に下車し、道路補修作業で、路面およ

び側溝に従事する。変更は、日本から帰還船を寄越さないからと言われた。

七月七日から始まった道路補修作業は延べ二百四十キロに達し十月十八日に終了した。その間、桶屋の経験者の募集があり二名、ここまで来たら、日本に何があっても帰るといふ執念から応募し許可された。樽の補修ということでしたが、さわったこともない樽、それもましてビヤ樽で、仲間二人で考えるだけで作業なし。それでも食欲は一人前で、倉庫にあるキウリ、トマトの塩漬けを腹いっぱい食べて、帰りは民間人が迎えに来て、一週間から十日間くらいは天国でした。

道路補修にしても、天候は安定していて、休業することにはなかった。ただし、ノルマは決められていて、監督がトラックに私たちを乗せて、ポツンポツンと所々に置いて、交互に向かい合って、両側の路面と側溝の除草、穴埋めなどしたが、当時未舗装だし、通過する車も少なく、案外と楽な作業であった。寒くもなし、畑のジャガイモの掘り残しなどいただき、食糧の足しにした。

彼らも大陸的で、コルホーズでノルマの収穫をあければそれで済みで、後は国家で保証してくれるという考えだから、掘り残しなど問題なくそのままにしてあ

る。その後で、ソ連工兵隊将校官舎での雑役、薪切り割り、室内の石灰塗りなどをしたが、石灰塗りには閉口した。石灰を水で溶き、刷毛で塗るのだが、長時間やっていると指に穴があき、ヒリヒリと痛く治りにくかった。この家の主人はモンゴル系の少佐で、黒髪黒目で親しみがもてました。作業が終わると黒パンやタバコなどくれました。

工兵隊だから、車庫に軍用トラックが入っていましたが、格納するときに、ラジエーターの水を抜いているのを見たが、停止するとき必ずやることで、五十年も前だからしょうがない。翌日エンジンをかけたら焼けてしまうからだろう。

道路作業中に、浅い大きな水溜まりを見つけ、中に入ったら貝(カラス貝)片手の掌くらいの大きさ、幅八センチ、長さ十三センチくらいで、縦にびっしり隙

間なくあるではないか。早速に実を取り出し、飯盒で茹で、皆で食べたが、美味で胃を充分満たしてくれた。これを長期に食べようと思ひ、天日乾燥したがだめだった。

移動作業なので、時間もなかったこともある。ピタミンの補給には、アカザやタンポポの葉を摘み、茹でてよく食べた。

ハバロフスク駅では経理分隊で、貨車より倉庫への荷おろしや移動作業などした。岩塩を初めて見て驚いた。淡い水色をしており、山から掘り出されたという。無蓋車に無造作に積んであった。塩といえれば海水にしか含まれていないと思つた。何を煮炊きするにも、味つけない塩はなくてはならない貴重品である。無蓋車より少々失敬して、そのまま使つたら気分が悪くなり、げぼげぼやってしまった。後で仲間に聞いたら、ニガリをとらなければいけないと教わり、一つ利口になりました。この作業は穀物の運搬もあつたので、各人が見つからないくらいの少量をいただき、宿舎で皆で食べた。このときは十名くらいで短期間であつたのを記

憶している。

昭和二十二年も終わり、昭和二十三年一月十八日、帰国のためトラック九台で、約二百キロ輸送され、小さな駅に到着し、一時待機した。一月二十日客車で集結地「ナホトカ」に向けて出発して、第五一分所に到着した。一月二十四日第三八〇收容所―第一收容所―第四收容所と移動し、一月二十八日第五三收容所へ入り（日本から帰還船を寄越さないからという理由）五月末まで、ナホトカ港の見える各所の作業所で倉庫の荷物の搬出入などの軽作業をした。

食事はとてもよく、白米に魚など充分で、ドラム缶に入ったバターなど少々いただきつつ、体重は六十キログラム以上にもなり、元気も回復し、帰国間近しを信じ労働する。

六月三日、第五三收容所より第一收容所に入り、縫製工として突撃隊に入る。これは本当の名目だけで、ミンなどさわつたこともなかった。

六月十三日、第三收容所に入る（持ち物の一斉検査）書いたものは、一切国外持ち出し禁止で、発見さ

れば残留になり、奥地に逆送すると驚かす。

六月十五日、ナホトカ出港、恵山丸（三千九百四十
六トン）に乗船。

六月十八日、舞鶴港に入港、入浴検査、支給品、聞
き取り調査などを終わり六月二十二日現住所に帰宅す
る。

最後に、お蔭様で生きて無事に帰って来た者として、
亡き戦友のことを少し記しておきたいと思えます。そ
の死には実に簡単で、病室で少し前まで、いろいろな
思い出話をしているうちに、すやすやと永遠の眠り
についたり、また起床してみると、パンを口に入れた
まま冷たい屍になっているというような状況で、垢だ
らけの下着には胡麻をまいたようにシラミがたかっ
ている。

別に自分としても変な感じもせず、不感症にかかっ
たようなものです。死体は裸体のまま外へ出してある
ので酷寒のため硬化している。唯物的な考えがかくす
るものか、自分自身驚いた。

戦友の墓掘りも容易でなく、大十字畝（ツルハシ）

を振りおろしても一向に受け付けず、地表より四十
五センチくらいからアスファルトを掘るようなもの
ではね返ってくる。枯れ木を集めて焚き火をし、少し
ずつ掘り下げるということで、その作業も三級（作業
休）の病人がやるのだから、能率はなおさら悪い。次
は俺の番かなという恐怖が頭の中をかすめるのです。
昭和二十年末より二十一年中頃まで、火葬は絶え間
ない。この地区だけでも約七百五十名の尊い命が失わ
れたから驚くほかはない。

不法な抑留中、帰国を夢見つつ、尊い命をなくされ
た多くの犠牲者に衷心より冥福を祈ります。

【執筆者の紹介】

現住所 神奈川県小田原市国府津町一六九五
本籍地 神奈川県小田原市国府津町一六九五
生年月日 大正十四年九月十八日
入 隊 昭和十九年十二月十日

東部第六部隊

終戦時の居住地 新京郊外病馬廠

入ソ日 昭和二十年九月一日

抑留地 ザバイカル州ハラグーン

作業 伐採

引揚 昭和二十三年六月十八日

引揚船 恵山丸

上陸地 舞鶴

(神奈川県 片山 正二)

終戦前後と抑留秘話

島根県 松浦 進

興安嶺山麓の攻防

満蒙の守備

南方では米軍の猛攻で熾烈な戦いが続き、沖縄本島の陥落が決定的となった昭和二十年六月・安部孝一中将の率いる満州一〇七師団一万三千余名は、阿爾山地区を守備増強するため哈爾濱を出発して五叉溝に移駐した。

この地は大興安嶺の険しい山並が連なり、裾野は荒漠とした大草原で遠く外蒙に達し野獣が出没する辺境であった。

戦史によると、ハロンアルシャンは温泉湧出し、此処に僅かな駐屯隊が孤立配備され北方海拉爾から南方熱河地区に至る広大な間隙には一兵の配置も無かった」と記述されており、ソ連兵による国境侵犯が頻発し双方の小競合いが続いていた。

師団將兵は暮舎生活を営み、連日陣地構築を急いでいた。私は歩兵一七八連隊（二〇九部隊）兵器室に所属し、十数名の技術隊員と測量器材を担いで山越え谷を渡って標高測点を設置することが日課で、山頂の要害では強者達が炎天のもとで汗と埃にまみれて岩肌の堀削に励んでいた。

しかし満ソ国境は日毎に風雲急を告げており予断を許さない緊迫した状況であった。

ソ連軍参戦

八月九日未明・静間を破る飛行音で眼を覚し舎外に飛び出て見ると、赤星印を着けた偵察機が低空を二・